

犬と人と花

小川未明

青空文庫

ある町まちはずれのさびしい寺てらに、和尚おしょうさまと一ひとぴきの大きな赤あか犬いぬとが住すんでいました。そのほかには、だれもいなかったのであります。

和尚おしょうさまは、毎日まいにち御堂おどうにいつてお経きやうを上げられていました。昼ひるも、夜よるも、あたりは火ひの消きえたように寂ひっそり然しとして静しずかでありました。犬いぬもだ**いぶ**年としをとつていました。おとなしい、聞き分わけのある犬いぬで、和尚おしょうさまのいうことはなんでもわかりました。ただ、ものがいえないばかりでありました。

赤あか犬いぬは、毎日まいにち、御堂おどうの上あがり口くちにおとなしく腹はらばいになって、和尚おしょうさまのあげてお経きやうを熱ねつ心しんに聞きいていたのであります。和尚おしょうさまは、どんな日ひでもお勤つとめを怠おこられたことはありません。赤あか犬いぬも、お経きやうのあげられる時じ分ぶんには、ちゃんときて、いつものごとく臉まぶたを細ほそくして、お経きやうの声こえを聞きいていました。

お寺てらの境けい内だいには、幾いくたびか春はるがきたり、また去さりました。けれど、和尚おしょうさまと犬いぬの生せい活かつには変かわりがなかつたのであります。

和尚おしょうさまは、ある日ひ赤あか犬いぬに向むかつて、

「おまえも年としをとつた。やがて極ごく楽らくへゆくであろうが、私わたしはいつも仏ほとけさまに向むかつて、

今度の世には、おまえが徳のある人間に生ま変わって来るようにとお願ひ申している。よく心で、仏さまに、おまえもお願ひ申しておれよ。おそらく、三十年の後には、おまえは、またこの娑婆に出てくるだろう。」といわれました。

赤犬は、和尚さまの話聞いて、さもよくわかるようにうなだれて、二つの目から涙をこぼしていました。

数年の後に、和尚さまも犬も、ついにこの世を去ってしまいました。

三十年たち、五十年たち、七十年とたちました。この世の中もだいぶ変わりました。

ある村に一人のおじいさんがありました。目の下に小さな黒子があつて、まるまるとよくふとつていました。歩くときは、ちやうど豚の歩くようによちよちと歩きました。

おじいさんは、かつて怒つたことがなく、いつもにこにここと笑つて、太い煙管で煙草を喫つていました。そのうえ、おじいさんは、体がふとつていて働けないせいもあるが、怠け者でなんにもしなかつたけれど、けつして食うに困るようなことはありませんでした。

「おじいさん、今年は豆がよくできたから持つてきました。どうか食べてください。」

「おじいさん、芋を持つてきました。どうか食べてください。」

「おじいさん、なにか不自由なものがあつたら、どうかいつててください。なんでもしてあ

げますから。」

いろいろな、村の人々は、おじいさんのところにいつてきました。そうして、おじいさんがもらつてくれるのをたいへんに喜びましたほど、おじいさんは、みんなから慕われていました。

村で若い者がけんかをする、おじいさんは太い煙管をくわえて、よちよちと出かけてゆきました。みんなは、おじいさんの目の下の黒子のある笑顔を見ると、どんなに腹がたつていても急に和らいでしまって、その笑顔につりこまれて自分まで笑うのでありました。また、村の人々は、どんなに働いて疲れているときでも、おじいさんが、そこを通りかかつて、

「いいお天気でございます。よく精が出るのう。」と、声をかけられると、人々は急に晴れ晴れした気持ちになって、また仕事にとりかかったのであります。

おじいさんは、この村では、なくてはならぬ人になりました。おじいさんさえいれば、村は平和がつづいたのであります。おじいさんは、若者の相手にもなれば、また子供らの相手となりました。

けれどおじいさんは、べつに富んではいませんでした。食べることに困らなかつたとい

うまでであります。そうして、こじき 乞食や、たびびと 旅人の困るものには、なんでも余あまったものは分けてやりました。

あるときのことです。むらびと 村人は、はたけ 畑から取れたものを持って、おじいさんの庭先へやつてまいりました。

「おじいさん、これを食たべてください。」といいました。

いつものごとく、にこにことして煙草たばこを吸すつていたおじいさんは、その日ひにかぎつて、常つねよりは元氣げんきなく、

「もう、わたし 私は、なんにもいらぬから。」と答こたえて、かる 軽く頭あたまを振りました。

むらびと 村人は、どうしたことかと心しんぱい配ばいでなりませんでした。

その明あくる日ひ、おじいさんは氣分きぶんが悪わるくなつて床とこにつくと、すやすやと眠ねむるように死しんでしまいました。いいおじいさんをなくして、むらびと 村人は悲かなしみました。そうして、ねんご 懇ろにおじいさんを葬ほうむつて、みんなで法事ほうじを営いとなみました。

「ほんとうに、だれからでも慕したわれた、徳とくのあるおじいさんだつた。」と、ひとびと 人々はうわさをいたしました。

また、二十年ねんたち、三十年ねんたちました。おじいさんの墓はかのそばに植うえた桜さくらの木きは、おお 大き

くなつて、毎年まいねんのくる春はるには、いつも雪ゆきの降ふつたように花はなが咲さいたのであります。
 ある年としの春はるの長閑のどかな日ひのこと、花はなの下したにあめ売うりが屋や台たいを下おろしていました。屋や台たいに結むす
 んだ風船ふうせん玉たまは空そらに漂ただよい、また、立たてた小旗こはたが風かぜに吹ふかれていました。そこへ五つ六つ
 子供こどもが三、四人集あつまつて、あめを買かっていました。
 頭あたまの上うへには、花はなが散ちつて、ひらひらと風かぜに舞まっていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二 講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

初出：「黒煙」

1919（大正8）年5月

※表題は底本では、「犬《いぬ》と人《ひと》と花《はな》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班

2011年11月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

犬と人と花

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>